

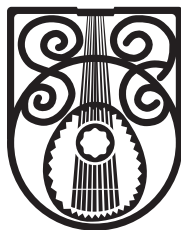
オーケストラ シンフォニカ 東京

第 56 回

定期演奏会

平成 27 年 4 月 12 日 (日) 午後 2:00 開演

第一生命ホール



O S Tの歴史

- 1915(大正 4)年 9月：武井守成*¹楽団創設
- 1916(大正 5)年 4月：楽団名をシンフォニア・マンドリニ・オルケストラと称する
- 1923(大正 12)年 11月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・タケキに改称
- 1949(昭和 24)年 11月：戦後初めての定期演奏会開催(第 49 回)
- 1949(昭和 24)年 12月：武井守成 逝去
- 1953(昭和 28)年 5月：オルケストラ・シンフォニカ・タケキ 第 55 回演奏会開催
- 1954(昭和 29)年 杉並マンドリンアンサンブル創立
- 1955(昭和 30)年 10月：杉並マンドリンアンサンブル 第 1 回演奏会(通算 56 回)
- 1956(昭和 31)年 7月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイに改称 第 57 回演奏会開催
- 1958(昭和 33)年 12月：オルケストラ・シンフォニカ・タケイ 解散
- 1959(昭和 34)年 12月：杉田村雄*²オルケストラ・シンフォニカ・タケイを復興
本楽団第 1 回定期演奏会開催
- 1986(昭和 61)年 7月：杉田村雄 逝去
- 1987(昭和 62)年 5月：楽団名をオルケストラ・シンフォニカ・東京に改称
- 2015(平成 27)年 4月：第 56 回定期演奏会開催

* 1) 武井守成 (たけい もりしげ：1890年10月11日～1949年12月14日)

枢密顧問官武井守正の二男として鳥取に生まれる。宮内省楽部長・式部官長、男爵。

マンドリン合奏団『オルケストラ・シンフォニカ・タケキ』(O S T)を主宰し、マンドリン合奏曲・ギター独奏曲の作曲家として活動。また雑誌『マンドリンギター研究』を発刊し、1923年にマンドリン合奏コンクール、1924年に作曲コンクール、1927年にはマンドリンオーケストラ作曲コンクールを開催してマンドリン・ギター音楽の発展に尽力した。

* 2) 杉田村雄 (すぎた むらお：1903年2月14日～1986年7月17日)

八王子・南多摩郡多摩村の村医杉田武雄の長男として生まれる。

暁星中学時代、クラスメートの斉藤秀雄とともに比留間賢八に師事、2人で暁星マンドリン倶楽部から静美社音楽部へと音楽活動を進める。

1939年O S Tに入団。戦時中、武井守成氏の多摩村東寺方への疎開に尽力し、音楽関係楽譜・資料も戦火を免れる。

武井氏逝去後、O S Tの再興にあたり理事長および指揮者を務める。武井氏の楽譜出版に尽力。日伊音楽協会理事長、日本マンドリン連盟副会長を歴任し斯界に貢献された。

プログラム

第一部 指揮：嶋 直 樹

1. 朝の歌 エドワード・エルガー 作曲（嶋 直樹編）
2. パレストリーナ賛歌 菅原明朗 作曲
3. 「富める人とラザロ」による五つの異版 ヴォーン・ウィリアムズ 作曲（嶋 直樹編）

第二部 指揮：石 井 啓 之

1. 小行進曲「ルイーズ」 武井守成 作曲
2. アルバムの二葉 武井守成 作曲
 (イ) ネーニア・アンティカ
 (ロ) ミヌエット
3. 浜辺の唄変奏曲(成田為三の旋律に拠る) 中野二郎 作曲
4. 悲愴序曲「受難のミサ」 鈴木静一 作曲

《 休 憩 20分 》

第三部 指揮：山 本 雅 三

1. スパニッシュ ダンス コンラッド・ヴェルキ 作曲
2. 怯える小鳥 ジュゼッペ・フィリッパ 作曲（中野二郎編）
3. 情熱的なタンゴ ルイジ・パパレロ 作曲
4. 幻想曲「華燭の祭典」 ジュゼッペ・マネンテ 作曲（中野二郎編）
 第一楽章 人々の祝福
 第二楽章 教会にて
 第三楽章 家族の祝宴

曲 目 解 説

第一部

朝の歌

エドワード・エルガー

E. エルガー (1857 年～ 1934 年) はイギリスの代表的な作曲家の一人です。代表作は、何と言っても「威風堂々第 1 番」でしょう。今回演奏する「朝の歌」は、1897 年に作曲された「バイオリンとピアノのための《2つの小品》作品 15」の第 2 曲を小管弦楽用に作曲者自身によって編曲したものです。今回の演奏では原曲のハーブパートをピアノ用に直して演奏します。

パレストリーナ賛歌

菅原明朗

菅原明朗 (1897 年～ 1988 年) は、当会の第 3 代指揮者として主に昭和初期に在籍していました。マンドリン音楽以外に管弦楽曲や宗教音楽の作品を数多く残しています。菅原作品の調査をされている孫の北島苑子さんの依頼により O S T 所蔵譜を確認していた際にこの「Omaggio a Palestrina (パレストリーナ賛歌)」が一般的に公表されている菅原明朗作品一覧に記載されていないことが判明しました。また、この作品が演奏されたとされる昭和 18 年 11 月の第 48 回定期演奏会も戦時中の規制により開催できなかったことがわかり、今回の演奏がどうやら「初演」となるようです。

題名となっているパレストリーナ (1525 年?～ 1594 年) はイタリア・ルネサンス後期の音楽家で数多くの教会音楽を作曲しています。菅原は賛歌ということでパレストリーナ風な曲を作ったはずなのですが、お聴きになればわかるように、まるで J. S. バッハの協奏曲のような形式です。どうしてこのような曲を作ったのか、また戦後なぜ演奏会にかけられなかったのかの答えは今後の研究に委ねたいと思います。

「富める人とラザロ」による五つの異版

ヴォーン・ウィリアムズ

R. V. ウィリアムズ (1872 年～ 1958 年) はイギリスの作曲家で民謡の採集を行い、それを元に多くの美しい曲を作りました。この「富める人とラザロ」による五つの異版は、スコットランドとアイルランドに伝わっていた同じ題材の 5 つの異なる旋律の民謡を集めたもので、変奏曲ではありません。題

材となっているのは新約聖書ルカ伝 16 章 19～31 節「金持ちとラザロ」の例え話で、生前貧しかったラザロの方が死後は金持ちより優遇されるというものです。1939 年のニューヨーク万博のために作曲されたハープと弦楽合奏のための作品です。

(文責 嶋)

第二部

小行進曲「ルイーズ」

武井守成

武井守成作品集には、「大正 15 年 9 月 19 日に、来朝中のスウェーデン皇太子・同妃両殿下のすすめに依り霞関離宮に於いて作曲者指揮により午前演奏を行い爾後本曲名に妃殿下の名をいただく。」と記されています。

アルバムの一葉

武井守成

(イ) ネーニャ・アンティカ (ロ) ミヌエット

元々は、昭和 3 年春、ギターを習い始めた作曲者の甥に与える目的で書かれたギター独奏曲です。昭和 4 年にマンドリンオーケストラ用に編曲され、アルバムの一葉として発表されました。古典のおもかげを主体として、極めて古雅ななだらかな旋律と和音で満たされています。ネーニャ・アンティカは古き子守唄あるいは古雅な子守唄とも訳されることがあります。

浜辺の唄変奏曲（成田為三の旋律に拠る）

中野二郎

原曲は成田為三が大正 5 年（1916 年）24 歳の時作曲の歌曲で、セノオ楽譜（西洋音楽の普及に努めた妹尾幸陽が明治 43 年より発行を始めた楽譜集）として大正 7 年に刊行されたものです。その名曲の旋律をもとに、中野二郎がマンドリンアンサンブル用の曲に仕立て、仙台アルモニア誌の第七巻第 84 号（昭和 15 年 12 月発行）で刊行したものです。マンドリンアンサンブルの名曲として現代でもよく演奏されています。

悲愴序曲「受難のミサ」日本二十六聖殉教ミサによる

鈴木静一

鈴木静一（1901 年～1980 年）は、イタリア人の声楽家サルコリに師事し、作曲家・マンドリニストとして活動を始めました。戦中戦後には黒澤明監督の『姿三四郎』はじめ数多くの映画音楽を担当しました。1966 年頃からマンドリン音楽界に復帰し、その死にいたるまで数多くのマンドリンオーケスト

ラ曲を作曲し、今なお多くのマンドリンオーケストラのプログラムをにぎわせています。

日本二十六聖人とは慶長元年（1597年）に、布教の名の下のスペインによる侵略を恐れた豊臣秀吉の命令によって長崎で処刑された26人のカトリック信徒のことを指します。日本でキリスト教の信仰を理由に最高権力者の指令による処刑が行われたのはこれが初めてでした。26人は後にカトリック教会によって聖人の列に加えられたため、彼らは「日本二十六聖人」と呼ばれることになりました。

作者の鈴木は、自身の書き残した文章で、こう述べています。

「ソナタ形式による『悲愴序曲』を書かせたのは、或る日かけ放しのFMから流れ出していた“日本26聖の殉教”のミサ曲であった。聞くともなく聞くうちに私は単声で合唱されるグレゴリオシャントにふと楽想を揺すられた。同時に、その26聖人の磔（はりつけ）の絵画をどこかで見たことを思い出した。フィレンツェカトリノかはっきりしないが博物館か画廊であった。その時、磔柱にかけられた多くの殉教者の顔に日本人の面影は認めたが、それが日本26聖であることはかなり後から知った。そんなことでこの素材に手をつけたが、序曲などの意識なく書き始めた—それがいつとなく型とおりの序曲になって行くのに気付いたが、不思議に抵抗は感じなかった。」

（文責 石井）

第三部

第三部はじめは、マンドリン合奏による特徴的な3つの舞曲をお聞きください。

スパニッシュ ダンス

コンラッド・ヴェルキ

カスタネットやギターで奏でられることが多いフラメンコにも取り入れられた、エキゾチックな3拍子の「ボレロ」のリズムの曲です。フランスのラヴェルのボレロが有名ですが、ドイツの著名なマンドリン作曲家の作品です。

怯える小鳥

ジュゼッペ・フィリッパ

「おどけたポルカ」という副題がついた楽しい曲です。ポルカはチェコのボヘミア地方発祥の軽快な2拍子の民俗舞曲。原曲は吹奏楽曲ですが、マンドリンの響きが、かしましくさえずる小鳥の鳴き声によく合い、ちょっとした物音に敏感に反応する小鳥たちの愛らしい様子が微笑ましく描かれています。

情熱的なタンゴ

ルイジ・パパレロ

タンゴは、19世紀の後半に移民達の文化が融合しアルゼンチンで発生したといわれています。強拍部を強調した2拍子のリズムです。この曲はマンドリン独奏曲「夜の鐘」「愛の喜び」の作曲者がマン

ドリンの為に書いたタンゴで、歌謡調の親しみやすい旋律がどこか懐かしさを感じさせてくれます。

幻想曲「華燭の祭典」

ジュゼッペ・マネンテ

第一楽章 人々の祝福 第二楽章 教会にて 第三楽章 家族の祝宴

数多くの作編曲で偉大な足跡を残した中野二郎（1902年～2000年）の編曲です。先生が意識し名付けた「華燭の祭典」という題名が、華やかで幸せなイメージをよりふくらませ、我が国マンドリン界ではこの曲の固有名詞として定着し親しまれています。中野先生に敬意を表し、以下に先生の解説を引用させていただきます。

「作者は正規の音楽教育を終えてから、直ちに歩兵第60連隊軍楽長となり、以後各地の軍楽長を歴任した。本曲は彼が1903年に歩兵第3連隊軍楽長となり、「降誕祭の夜」、「国境なし」等を作曲した後の作曲意欲最も旺盛な37才頃の作品である。本曲はイタリアの著名な作曲家ホルツォーニ、テュエク、ウォルフ・フェラーリの賞讃を得た。マンドリン合奏曲として本邦に親しまれている「秋の夕暮」、「メリアの平原にて」はこの数年後に書かれたもので、この時代には吹奏楽の力作が多い。本曲は1966年6月、同志社大学マンドリンクラフが初演して以来、マンドリン曲の名曲として本邦に定着してしまった。我々はこの曲にいままでの曲になかった新しい魅力を見出したのであろう。それは何よりも聞くもの、奏く弾くものを楽しませるおもしろさ、いわゆる演奏効果の大きさが我々をひきつけるからである。

第一楽章 人々の祝福 (Allegro con brio) 最初の不完全小節の一音、それに続くリズムカルなシンコペーション。第一楽章の魅力はこの一小節に凝集して圧倒的に我々を打つ。

第二楽章 教会にて (Andante Religioso) 静かに重々しく曲は始まる。つづいてマンドローネの低音の上にマンドラの二重奏が8小節にわたって奏され、徐々に気分が盛り上がる。そしてついには宗教的感動にまで達する。華燭の典も最高潮である。

第三楽章 家族の祝宴 (Allegretto Pestoso) 一転して軽快なメロディーが流れる。そこには家族の喜びがあふれている。この三楽章は曲想テンポともめまぐるしく変わり、テクニックも高度なものが要求される楽章である。興奮の頂点は第一楽章の主題の再現となってあらわれ、曲は最後のヴィヴァーチシモで堂々と終る。(解説/中野二郎) 」

*「華燭の祭典」の演奏にあたり、高崎マンドリン合奏団様よりパソコンで写譜した美しい楽譜をご提供いただきましたことを心より感謝いたします。

(文責 山本)

